

それでも 希望は 労働運動

ハ・ジョンガン著

ハ・ジョンガンの『それでも希望は労働運動』は
労働問題を自らの問題ではないと考えている
労働問題に対する理解が特別に深くない
そんな普通の人たちを対象にした本です。

労働者でありながら自分は労働者ではないと思っている人たち
家族の中に労働者がいるのに
労働問題は自分とは別の、関係のない問題だと思っている人たち
労働問題は民主労総・韓国労総だけの問題だと思っている人たち
労働運動は労働者にとってだけ有益で
社会には有益ではないと考えている人たち
そうではあっても
自分は客観的で合理的な思考をしようと考える人たち……
そのような人たちが偶然にこの本を読んで
『あー、このように考えることもできるな』と
理解できるようにしようという思いで構成しました。

ハ・ジョンガンは 1955 年に仁川で生まれ、1 年の内の 300 日以上、全国各地を回って労働教育をしています。
現在は、ハンウル労働問題研究所所長、ハンギョレ新聞客員論説委員、ソウル地方労働委員会の公益委員、ソウル中央地方裁判所の調停委員、仁川大学講師、韓国労働教育院客員教授、労働者教育センター教育委員などを務めています。以前には仁川キリスト教都市産業宣教会実務者、(社)韓国産業安全保健教育研究センター所長、ハンギョレ労働教育研究所の研究員などを経験しました。1994 年に「遅すぎて会った人々」(「いつも胸が震える初めてです」)で、第 6 回全泰堯文学賞受けたことを、人生で最も大きな栄光だと言っています。

労働運動を批判しようとするなら

これから何人死ななければならぬのですか？

先週の日曜日に礼拝を終えた後で、折角だから小さい子供を連れて、隣人たちと一緒に近くへ遊びに行く計画を立てました。お金をかけて車も磨いて、そんなことの殆どなかった私も、少なからず夢が膨らみました。

その一日前の土曜日は大川で行われた全教組の先生たちの修練会に参加しました。夕方講義を終えて、深夜に出発してソウルに向かう高速道路で、ラジオのニュースで現代重工業の下請け労働者のパク・イルスさんが焼身自殺したというニュースを聞きました。日付が変わって家に到着した後、インターネットに接続して現代重工業の労災の被災者・ユ・ソクサンさんが自殺したという記事を読みました。

翌朝、食卓を囲んで座った時に家族に話しました。

「今日遊びに行くことにしていた計画は、取り止めた方が良いでしょう。^{ウルサン}蔚山で労働者がまた二人も自殺したよ……、一人は焼身して亡くなり、一人は首を吊って死んだよ……、今日一日、その労働者を思って……、敬虔に過ごすのが正しいと思う」。

子供たちに話をしながら、私は喉が詰まりました。

去年、多くの労働者が自ら命を絶ちました。その度ごとに、私たちは胸を痛めました。私たちはその間、何をしていたのか……、耐えられない「借り」があるようで、苦しみました。昨年一年もそうして辛い一年を過ごして、今年もまた、このように始めることはできません。今年一年間、また多くの労働者が自ら死を選択して、烈士になる姿を見ながら生きていくことはできません。

小さな教会で礼拝をする一人の牧師が自身のホームページに、二人の労働者の死を哀悼する記事を書きました。パク・イルスさんとユ・ソクサンさんの死に初めて接した時、『アー、アー、最悪！』と声を出すほど驚いたというその牧師は、「私たちの今の『姿』が、私たちの今の『水準』が、そして私たちの今の『力』がこれだけしかないで……。だから、まさに私たちがその殺人の共同正犯なので……。ただ許しを請うだけだ」と記した短い文章を、次のような言葉で締め括りました。

「パク・イルスさんの姿で焼身され、ユ・ソクサンさんの姿で首を吊られた神様、私
たちを許して下さい……」。

二人の労働者の死に対して、この牧師のように、自らをその死の共同正犯だと考えて
許しを請うたキリスト教徒が、果たして何人かでもいたでしょうか？

ある女性労働者がその牧師の文章の下に自分の意見を書きました。自分は絶対に許し
を請わないと書きました。永い非正規職労働者としての生活の末に、今やっと正規職労
働者になった自分が、なぜ同じ労働者の死に許しを請わなければならないのかと絶叫し
ました。自分は許しを請わないで、より一層、必死になって労働者として自分の権利を
求めて生きるぞ、と書きました。「彼がそんな風に生きたかった明日」を「私の今日と
して生き延びる」と書きました。

私はその絶叫を「その労働者は、そのように死を選択せざるを得ないように追い込ん
だ人たちとは絶対に違うので、同じ労働者である私たちがなぜ許しを請わなければなら
ないのか」という抗議の意味と理解しましたが、「絶対に許しを請わない」という彼女
の話は、二人の労働者の死に怒った彼女が、自分のやり方で許しを請う方法だったです。

また他の非正規職労働者は、「許しを請わない」という言葉は「彼らが成し遂げるこ
とができなかった闘い」を「私がやり遂げる」という、本当に毅然とした決意だと解釈
して、羨ましがりました。それと同時に、自分は「せいぜい特別党費を稼ぐために明け
方まで別のアルバイトをしたり、暇ができれば民主労働党の債権を売りに行くこと以外
には何もできない」ので、と恥ずかしがりました。

しかし、本来恥じなければならない人は別にいます。去年、1ヶ月間に4名の労働者
が首を吊って死に、焼身して死に、飛び降りて死んだのに、大韓民国の国会では、それ
らの事件について一言も言う国会議員がいません。真相調査をしようという言葉さえ出
てきません。どうしてこんなことができますか？ これからどれだけ多くの労働者が死
ななければならないのですか？

故パク・イルスさんは「是非とも、下請けの非正規職労働者も人間らしく生きること
ができる、真の労働の対価が保障される職場になることを切に希望する」という言葉で
遺書を終えました。

職業病で治療を受けていた病院の欄干で首を吊って自殺した故ユ・ソクサンさんは「腰

の手術の後の痛みが酷くて、あまりにシンドクて苦しい」、「手術するのは余りにも荷が重い」と日記に書きました。

今後どれだけたくさんの労働者が死ねば、非正規職労働者の差別が撤廃され、産業災害の被災労働者の権利が保護されるのですか？「パク・イルスさんの姿で焼身し、ユ・ソクサンさんの姿で首を吊られた神様」に、私たちに許して欲しいと再び祈らなければならぬようなことが起こらないように、国会が、労働部が、企業が、労働組合が、そして私たち一人ひとりが、今からしなければならぬことは何なのでしょう？

労働運動を批判しようとするなら

聖職者の三歩一拝と労働者のストライキ

セマングム事業の中断を求める聖職者の三歩一拝が国民の胸に大きな衝撃を与えた理由は、何よりもそれが人間の限界で、耐えることが困難なほど大きな苦痛だったためだろう。どうして、三歩歩いて一度お辞儀をするというやり方で、^{チョンブク}全北の^{フアン}扶安からソウルまでの800里の道のりを、65日間も進んで来ることができたのでしょうか？ 万一、人間がそのようなことをすることができるのなら、造物主は人の身体を今とは違う構造で作っておかなければなりません。今からでも事務室や部屋で、三歩歩いて一度お辞儀をするやり方で何メートルかでも進んでみるようお願いします。その苦痛がどれ位の忍耐力を必要とするか、少しは理解できます。

三歩一拝が人々に与えた感動の波が、何日間か全国を覆いました。人々が慌てて家を出てその行列に参加し、道を行く多くの人たちがその光景を見て、胸の深いところからこみ上げて泣きたくなるのを堪えることができませんでした。学校に行った学生も、苦しい労働に苦しむ会社員も、道を通り過ぎるおばさんも、道を警備した戦闘警察も、泣きました。

メディアも三歩一拝に関するニュースが毎日報道されましたが、異様なのは、その報道の焦点が4人の聖職者の『高潔な苦痛』にだけ合わされ、本来の『セマングム事業』の妥当性の有無とその弊害については、ほとんど扱われなかったということです。繁華街を歩く市民へのインタビューでも、『市民』は一様に『非暴力の偉大さ』について話すだけで、聖職者がそのようにしてまで命を懸けて涙で訴えた『セマングム事業』の内容については話しをしませんでした。

『セマングム事業』というのは全北の扶安と^{クンサン}群山の間の干潟を埋めてしまおうということです。それは私たちの時代の金銭万能思想から始まった自然軽視風潮の決定版です。日帝時代以後に歪曲された過程を歩んできた非正常な政経癒着が、12年間のあらゆる策略によって創り出した作品です。だから『セマングム』は、今や私たちの時代の正しくない勢力と善良な人たちの対立を象徴する代名詞になりました。

聖職者の今回の三歩一拝について何か言いたい人は、少なくともセマングム事業の内

容とその本質を理解しなければなりません。そして、4人の聖職者が、骨の軋むような苦痛を通じて私たちに切実に訴えたい願いの内容が何かを、知らなければなりません。

人々は三歩一拝について話しながら、それとなく最近の労働者の行動を非難もしました。ある放送の司会者は「たった一度の闘争もない、たった一言の叫びもない、聖なる行動」を称賛すると、直ちに続けて「この聖職者の立派な行動に比べると、最近展開された貨物運送運転士のストライキ、全教組の年次休暇闘争、公務員のストライキ賛否投票行動は、私たちに多くの反省を求める」と、自分勝手に付け加えました。かなり進歩的だという評判の週刊誌さえ、三歩一拝の記事に、火炎瓶を投げるデモの場面の写真を一緒に掲載しました。

労働者たちが聖職者の三歩一拝を見て、自分たちの闘争のやり方について自ら反省したり、この間労働者が環境運動に特別な関心を持たなかったと、自ら反省することを望むということです。しかし当事者でない人が、聖職者の三歩一拝と労働者のストライキを当て付けに話すには、少なくとも次のような内容を理解することが前提でなければなりません。

最初に、途中で電話一本で利潤を挙げて、貨物運送運転士の苦労を横取りする貨物幹線仲介業者が全国に8千業者も存在していて、幸せな暮らしを保証されることのない労働者が問題を解決するために、自らの経済的な損失を覚悟して行う『ストライキ』は、世界の多くの国で合法的に保障されている労働者の基本的な権利だという事実です。

二番目、教育部の『NEIS』システムは、私たちの社会でどんな価値より大切に守られるべき学生たちの人権を侵害するシステムで、全教組の教師たちは愛する生徒たちの人権のために、自分たちが受ける損害を甘受して闘っているということです。

三番目、国際労働機構(ILO)に加入した170余り国々のうちで、公務員の団結権さえ認めない国は我が国しかなく、「公務員たちがストライキをして行政機関が麻痺した時、北朝鮮が攻め込んだらどうするのか? だから我が国の公務員は労働組合を組織できない」という論理は、今では何の合理性もない古びた主張で、公務員たちがストライキをするのかしないのか、自分たち同士の意味を確認する投票行為さえ不法な集団行動だと規定するのは、人間の基本権を侵害する後進国的な発想であるという事実です。

このような事実を理解できない人なら、むやみに非暴力の崇高さで当てこすって、労働者のストライキを非難するものではありません。学生たちのデモや労働者のデモは、

すべてそれなりの理由があつて、デモの現場で火炎瓶で、盾を持った警察が対立するのも、何でもかんでもデモ隊の誤りとして責任を被せる訳にはいきません。三歩一拝の中心となった4人の方は全員聖職者なのに、一般の人たちにも聖職者の高潔なやり方を要求するのは合理的ではありません。

ムン・ジョンヒョン神父が弟のムン・キュヒョン神父の苦行を見て「二度と杖で幼い戦闘警察の盾とヘルメットを引っ叩かない」と告白した事実を、保守マスコミが強調する時には、精神をキチンと整理して、分かりやすく解釈する必要があります。

訳者註：『NEIS』システムは文部科学省と17の市・道教育庁、傘下機関と174の教育支援庁、1万以上の各級学校を網羅する大規模ネットワーク。2003年に全教組の授業拒否ストライキはNEISからだった。個人情報成績はもちろん、身長と体重などの健康関連事項も一括入力され、学生の情報権侵害の問題がある点と、教育の行政化を反対の理由掲げたが、何よりも大きな理由は、教育の中央統治化の完成であった。事業契約を締結したサムソン SDS は、強いセキュリティによって問題はないとした。（ウィキペディアより）

労働運動を批判しようとするなら

金持ちたちの学校の貧しい生徒

金持ちの町内の近くで貧しい生活をしたせいで、幼い時から付き合い合った友達の中には本当の金持ちが何人かいる。初めは我が家は貧しい順で二番目から三番目くらいだったが、もっと貧しい家の子供たちが一軒また一軒と引っ越ししてしまったせいで、後では結局、我が家が最も貧しい家になった。

子供たちの中の何人かは、昼休みになると家から「お手伝いさん」が包んで持ってきた、湯気がホカホカ立つ暖かいお昼を広げて、他の子供たちと分け合ったりしたが、私はお母さんが包んでくれた弁当で、貝の塩辛のおかずの臭いがすると子供たちが顔を背けてしかめっ面をしたせいで、弁当を窓枠に置いて頭を窓の外に出したまま一人で昼食を食べたりもして、貝の塩辛のおかずが全部なくなるまで、何日間かはお昼をそんなにして食べた。私の背後から「美味しいおかずを買ってきて、一人で食べている」と、コソコソ話すような役に立たない人間は、その時代にも、何時の時代にもいるものだ。

そのような雰囲気でも、私が学校に最後まで続けて行くことができ、おそらく私が学父母会に「頭をピンと上げて」参加して、代議員に選ばれた理由をあえて説明しようとする……、結局私の自慢話しになるかも知れない。好きなようにお察し下さい……。

年齢が 50 を越えたこの頃、その友人達は何年間か、一ヶ月に一回ずつ集まっていた、私にも連絡はくれるが、私はその集りにただの一度も行こうとはしなかった。その友達らが一ヶ月に一回ずつ集まる最高級の食堂もやはり、幼い時の友達が経営する、高いことで有名な日本料理店だ。

この頃は、その友達たちが経営する会社で、私がしている仕事に関連した事件が突発したり、私たちの事務室の弁護士の急な助けが必要な友達が時々連絡してくれた時に、会う機会があるだけだ。その友達がする話や、橋一つ渡った別の友達の知らせを聞く度に、口があんぐりと開く。

金持ちの友達たち

我が国で最も高いコーヒーを売ると噂の高いコーヒー専門店を経営する社長は、小学

校の時に私と仲の良かった友達だ。外国で20年以上も暮らして帰って来たというので会ったところ、「我が国のコーヒー文化は外国と比較して50年程遅れていないか？」と訊いてきた。私は「それが500年程遅れていても、何か関係あるのか？」と返事をした。

一度見物に行ってみると、一杯何万ウォンもするコーヒーを飲もうと、人たちがイライラして待っていた。見覚えのある芸能人の顔も見えた。どうしてもコーヒー倉庫を見物させるというので付いていくと、小さな缶詰を指して「これ一缶が200万ウォン位はする、コロンビアでも一年に何キログラムしか生産されていない。私の見たところ『〇〇〇』コーヒーは、原価何百ウォンにしかない混ぜ物に過ぎない」と、誇らしく話した。

大韓民国の金持ちの家の子供たちの遊び場という繁華街で、大きな美容室を経営する友達もいる。両親から受け継いだその店が、元々その友達の所有だ。大韓民国のおしゃれな人がみんな集まるという別の繁華街にも、やはり両親から受け継いだ店をもう一軒持っていて、その商店街で大きな韓国食堂の経営もしている。「君、この頃どれ位儲けているの？」と尋ねると、その友達はしばらく頭の中で計算するような格好をして「ウーン、多い時には……、一日に3千万ウォン位儲けて」と言った。売り上げがそれ位になるという意味だよ、まさかそれが純収益ということでは……。

その友達が「一杯やるか」と言ったが、酒をほとんど飲まない私は、「次の集りに行かなくては……」と抜けた。後で聞いたところ、4人が一軒に行って5百万ウォン分位飲んだそうだ。ところが、聞くところでは、財閥の誰々が常連として出入りするというその店で、一晩に5百万ウォン位を飲んでも『成金』扱いにしかされないということだ。韓国の資本家を代表する財閥の金持ちと比較すれば、自分たちはただの『雀の涙』程の存在ということだ。

この友達がデパートの名品店の前を過ぎて、2千万ウォンのコートが気に入ったと、いきなり入って行って、それを着て出て来ても、カッとすることができただろうか？ 一日稼いだ金ほどにもならないのに……、そのような考えが浮かんだ。ドラマ<春の日>で、コ・ヒョンジョンが着て出てきた服が、一セットで1千万ウォンもしなかったそうだ。そのような服を日常的に売り買いする世の中が、私たちの社会の一隅に堂々とあるのだ。

その友達に「君の町内に住む子供たちは、みんな家庭教師の教えを受けると言うけれど、君の家の子供たちもそうか？」と訊いたところ、友達は「うちの大きい子もそうだ

し、末っ子が今している」と言った。私が「本当に課外教育の費用が、1ヶ月に科目当たり1千万ウォンずつかかるのか？」と尋ねた時、友達は「それは昔の話だ」と言った。1科目に2千万ウォンずつ、5科目で一ヶ月の課外教育の費用だけで1億ウォンはかかるということだ。最初から「ソウル大に合格すれば何億」そんな成果給を要求する講師も多いということだ。この『腐った奴ら』の学閥中心社会で、自分の子供たちがソウル大に入るためというのに、金のある人間がそれ位の金を出さない訳がない。

一坪が数千万ウォンもする高価な土地で食堂を経営する友達の話も伝え聞いた。「若者たちを相手に特別に高くない食べ物を出す食堂なので、カードでなく現金で飲食代を支払うお客さんがほとんどだそうです。土曜日に徹夜で営業をすれば、その日一日だけの売り上げが5千万ウォンも上がるそうです。家族が日曜日の明け方ごとに、大きなスーツケースを持ってきて、お金を一杯に詰め込んで持って帰るということです」。

韓国で一番高いマンションを一戸を売ったところ「一ヶ月で丁度7億ウォンが手に入ったよ」という話も聞いた。

ますます増える高所得者と不労所得

問題は、このように働かないで簡単に金を稼ぐ高所得層の所得が増える速度がますます早くなり、その速度がどんどん早くなっているということだ。「一日に3千万ウォンほど儲ける」という友達に、1年前に同じ質問をした時には「一日に3千万ウォンほど儲ける」と答えた。「このように働かない高所得層の所得が1年間に100%も増える間に、大企業の正規職の『労働貴族』たちの所得はどれほど増えたのだろうか？ 人々に非難されながら必死に賃金引き上げ闘争をしても、10%引き上げさせるのも難しい。

年俸数千万ウォンを受け取る労働貴族もますます貧しくなっているのです。自分の**絶対生活**の水準が向上していると感じることができないのです。マンションの評数が段々広くなって、自家用車の排気量が徐々に大きくなっているのに、前より豊かに暮らせていると錯覚しているだけで、実際にはますます貧しくなっているのです。これが大企業正規職労働者の状況なのに、下請け業者の非正規職の労働者については、これ以上話す必要もないだろう。

こうした現象を解決できなければ、私たちの経済に希望はない。働かないで簡単に金を儲ける高所得層の所得が、速いスピードで増えるのを縛り付けることができなければ、

私たちは再び回復できない経済危機に落ち込むしかない。

庶民とはほとんど接触せず、自分たちだけの世界だけで別に遊んでいる金持ちたちは、人々の目には良く見えない。このような本物の金持ちたちに対しては怒らない人たちが、大企業正規職の賃金引き上げ闘争に対しては、『労働貴族』のストライキだと憤慨するのだ。働かない高所得層と、熱心に働く労働者の間の途方もない両極化現象を見ることができない優しい労働者たちが、労働者内部の正規職と非正規職との両極化現象に胸を痛めながら、自分の賃金引き上げ闘争は韓国経済に有益ではないと、自ら自虐心を持たざるを得ない。

だから、私たち同士が互いに正規職だとか労働貴族だとか争っている様子を、本当の金持ちたちが見下してどれ程面白がっているか、そのように考えると、道を歩いても歯ぎしりする。私は生きている間だけでは、この金持ちたちと闘うには時間が足りない。操縦士のストライキは、このような金持ちとの闘いの一部としての意味を持つ。

勉強たくさんした学者に対するお願い

勉強をたくさんした人がしなければならない役割の一つは、私が皮膚でしか感じられないこうした現象を、データを使って体系的に説明する仕事だ、というのが私の素朴な願いだ。高賃金労働者と低賃金労働者の所得差別を説明する資料は多い。『勤労所得上位何パーセント、下位何パーセント』などの資料は、マスコミでもしょっちゅう引用される。しかし、働かない高所得層と汗を流して働く人たちとの所得差別を説明する資料は、特別にこれといってない。

企業に投資する考えはなくて『金を巡って、金を食べる』ところだけを探して飛び交っている資金が 420 兆ウォンもなるのに、その金額は我が国の年間の政府予算の 3 倍にもなり、国防予算の 20 倍にもなる規模だということがどんな意味を持つのか、ちょっと誰かスッキリ説明してくれたら良いのに。

国民の中の上位 1%が、我が国全体の私有地の 51.5%も所有している封建的コメディのような現象が、どうして近代国家、文明社会でも可能なのか、ちょっと誰かスッキリ説明してくれたら良いのに。

2004 年度の可処分所得が、企業は 41%も増加したが、家計は 0.9%しか増えなかったということが何を意味するのか、そして企業の可処分所得の増加率が大企業と中小零細

な下請け業者の間で、また途方もない格差を示しているということがどういう意味なのか、ちょっと誰かスッキリ説明してくれたら良いのに。

上場企業の純益が前年度に比べて2倍も増え、株価は史上最高額を記録していて、経常収支の黒字は130億ドルにもなり、外国為替の保有額が2千億ドルにもなり、企業の現金保有額は66兆ウォンにもなるなど、企業競争力は歴史上最高水準なのに、雇用の増加率は0%台に留まっていて、民間消費はむしろ0.5%減少したという、この呆れ返る状況の責任が一体誰にあるのか、ちょっと誰かスッキリ説明してくれたら良いのに。

私の幼い時の友人がこの文章を見ることになれば、多分、私にはこれからは連絡をくれないかも知れない。私は私たちの社会の金持ちの実態を覗き見ることができる唯一つの通路を失ってしまうことになるわけだ。これからは、勉強をたくさんした人たちが、その通路を用意しなければならない。

この途方もない金持ちたちを作り出す構造と闘わない人たちは、非正規職労働者の差別撤廃の闘いをしない人たちと同じく、しなければならない仕事をしていない人たちだ。

* ある調査によると土地代の上昇による不労所得の総額が、同じ年の全労働者の1年の賃金総額よりも多いという。すなわち2005年になって、不動産価格の暴騰で発生した不労所得は346兆ウォンで、これは昨年の284兆ウォンから18.9%増加し、1991年以後で最大規模である。この数値は2005年一年間で1400万人賃金労働者が受け取った賃金総額（韓国銀行の被雇用者報酬総額）、342兆ウォンよりも多い金額である。

労働運動を批判しようとするなら

勤労者派遣法と非正規職に関する企業の主張

労・使・政間で広がっている非正規職労働者の問題に対する議論を見ていると、勤労者派遣法の制定が初めて話題になり始めた 90 年代中盤のことが思い浮びます。その頃に行われた勤労者派遣法に関連する公聴会で、日本の労働者派遣法の制定に主導的に参加した日本の法学者は「日本は労働者派遣法を拙速に導入した後、大きな後悔をしている。韓国がその前轍を踏まないように願う」と話しました。当時、日本が拙速に導入したという労働者派遣法の制定について議論した期間は、何と 15 年でした。ところが我が国は、勤労者派遣法の導入が話され始めてたった 3 年目に「先進国にもある良い制度」と言いながら急いで法を制定しました。

当時、私はある法律家団体が勤労者派遣法に対する意見書を国会に提出する仕事に参加し、外国の労働者派遣法に関して学ぶ機会がありましたが、ほとんどの先進国では、労働者派遣法の趣旨は、企業の労働者派遣行為を厳格に規制したり、派遣労働者の権利を保護するためのものであり、ほとんど唯一日本が、労働者派遣を助長できる内容を持っていました。ところが当時、我が国の企業と政府は日本の法体制を模倣して導入し、「労働者派遣法は先進国すべてにある良い制度」と主張したのです。

それとよく似た主張が最近でも繰り返えされています。企業の利益を代弁する人たちは「雇用増大のために派遣関連の規制を緩和しているのが世界的な趨勢だ」と言って、派遣業種の拡大が、あたかも当然の道理であるかのように主張しています。しかしその人たちは、グローバリズムの風が急激に吹いた 90 年代に、非正規職労働者の規模を拡大した多くの国が、2000 年代に入ってから、それが国益に特別に役に立たなかったと反省して、非正規職労働者の数を減らすための様々な努力を続けているというのが世界的な傾向だという点は、懸命に無視しようとしています。

フランスでは、病気・出産・休暇などで欠員ができた時にだけ非正規職労働者を使うのが一般的で、アメリカでは、非正規職労働者を雇用した会社がほとんど大型化され、非正規職労働者に対する教育と社会福祉の恩恵がほとんど同等で、ドイツでは、建設業種を除く全業種に労働者派遣が可能ですが、同一労働同一賃金原則が厳格に守られ、非

正規職労働者といっても特別な不利益はないという点も、やはり必死に隠そうとしています。

我が国の労働者の非正規職化のスピードが世界で最も速く、OECD 加入 30 ヶ国の中で非正規職労働者の比率が最も高く、典型的な市場経済主義者である国際金融資本でさえ、韓国政府に非正規職労働者の数字を減らせと要求したという事実も、やはり懸命に無視しようとしています。

労働界が非正規職労働者の規模は約 800 万人だと主張する一方、経営界は約 300 万人にしかないと主張します。他の労働者に比べて明らかに不利益な待遇を受けながら、雇用不安に苦しめられていることが明白な社内下請け労働者や、特殊雇用形態の労働者を非正規職労働者ではないと主張しながら、何とかその数を減らそうとすることは、非正規職労働者の問題の解決には全く役に立ちません。

その解決方法についても見解の差は極めて大きいのです。企業は非正規職労働者の問題解決の責任を、大企業の剛性労組に転嫁しており、政府の見解もこれと大きく異なります。このような主張は、我が国の大企業労組が剛性なせいで、不当な特典を享受しているということを前提とします。しかしこの人たちは、最近我が国に入ってきている外国人の経営者が「韓国にくる前には、マスコミの報道で韓国の大企業労働組合は闘争的で過激だと思ったのに、来て直接ぶつかってみると、事実はそうではなく、非常に合理的だった」と、繰り返し話している事実は懸命に無視しようとしています。

このようなあらゆる行為の共通点は、企業の短期的利益や企業経営者の私利私欲、またはそれに奉仕することが自分の職務である人にとって有益なだけで、国民と国全体の利益には害になる結果を招くということです。

* 非正規職の増加が労働市場の硬直性、正規職の高賃金のせいではなく、非正規職の雇用が企業の経営成果を改善したという証拠もない、という研究結果が最近次々と発表されている。加えて、非正規職の雇用は企業の数量的な柔軟性を増大させ、労務比率を減少させるが、離職率を増加させて労働生産性を低下させ、営業利益に長期的には否定的な影響を与えるということだ。結局、韓国では、労働市場の硬直性のせいで非正規職が増えるのではなく、逆に、企業または市場の横暴性を制御する労働市場の硬直性が欠如しているために、非正規職が増加したということだ。